

### <研究ノート>オランダにある幕末維新史料 : とくに日本海軍留学生の記事

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / 社会労働研究

(巻 / Volume)

34

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

57

(終了ページ / End Page)

130

(発行年 / Year)

1988-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006808>

## オランダにある幕末維新史料

——とくに日本海軍留学生の記事——

宮 永 孝

はしがき

徳川幕府がヨーロッパの近代文化や科学技術を学ばせるために、十六名（のちに一名脱落）の留学生を最恵国オランダへ派遣するまでには紆余曲折があった。

万延元年（一八六〇年）ごろから文久元年（一八六一年）にかけて、幕府は海軍を拡張し、軍艦を製造し、軍制を改革しようといった機運に向かっていた。が、文久元年の一月から二月にかけて、軍艦奉行（木村摂津守・井上信濃守）らの間で「留学生なうしせい井上造船伝習建議案」といったものが作られた。この建策の内容は、伝習生は、長崎海軍伝習所で航海術を修め、太平洋横断にも成功したので技量もすぐれており、この上は「海防接戦之儀」（海上戦術）を学ぶことが急務であり、兵術と外国事情の探索を兼ねて、かれらを海外へ留学させるべきである、といったものである。

しかし、この献策は外国奉行らの賛同を得ることができたが、幕府の財政難から勘定奉行の反対にあって一時頓挫

した。けれど駐日公使タウンゼンド・ハリスは、任期満ちて帰国する際に、「我政府に軍艦の用意なかるべからず、學術伝習の等閑るべからず」(田辺太一『幕末外交談』)と、閣老安藤信睦にいい、アメリカ修好通商条約第十六条にある「日本政府、合衆国より軍艦、蒸気船、商船、漁船船、大砲、軍用器並兵器の類、其他需要の諸物を買入、又は製作を誂へ、或は其国の学者海陸軍法之士諸科の職人並船夫を雇う事」を引いて、アメリカへの艦船、武器製造等の委託を勧めた。

これに対して幕府は、文久元年七月九日付をもってハリスに、久世、安藤両閣老より正式に洋式軍艦二隻の建造を委託する書簡を送った。

亞墨利加合衆國ミヌストルレンシテント

エキセレンシー、トウンセントハルリス江

以書翰申入候、兼て会話之序相談およひ置しことく、別紙註文之通軍艦二隻その政府工場に於て打立頼入度、就ては先般此方役人差遣し為立合候事可然、旨忠告の趣あれども、右は即今治定の答およびがたく、猶後日の商儀に譲り、兎に角右二隻の軍艦製造之儀はその政府の懇親を頼み方事周旋を望むところ也

尤委細之儀は猶外国奉行より引合可及候間其段心得居らるゝ様いたし度候、拝具謹言

久世大和守

花押

安藤対馬守

花押

(一)

右の引用文によると、軍艦二隻はアメリカの造船所で建造してもらうが、役向の者——工事の監督（留学生）の派遣は「猶後日の商儀に譲り」ということであるから、あとで相談のうえ決定したいというのである。

この間、幕府は海軍の拡張とその強化に一層の拍車をかけ、文久二年の閏八月には小普請入りしている者の一部が、御軍艦奉行支配に組み入れられることになった。勝海舟の『海軍歴史』に、「同年閏八月十二日、小普請支配之者（小普請入しているが御目見以上のもの）百九十五人、同組（小普請で御目見以下のもの）三十人、都合二百六十六人、御軍艦奉行支配に被属、其後海軍奉行並支配に被属」とある。この時期の海軍奉行（御軍艦奉行）は、木村摂津守（芥舟）で、同役並は勝麟太郎（海舟）であり、そのあと矢田堀景蔵（鴻）と引き継がれる。後述するオランダ留學生の内田恒次郎、榎本釜次郎、沢太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平らは、いずれもこの軍艦組に所属していたが、軍艦奉行木村摂津守と勘定奉行小栗上野守の周旋によって、文久二年九月晦日にはアメリカへ派遣されることに決した。

軍艦組内田恒次郎らがアメリカへ派遣されることに内定したのは万延元年（一八六〇年）十一月十日のことであり、軍艦組より、内田恒次郎・榎本釜次郎・沢太郎左衛門・高橋三郎・田口俊平ら五名、蕃所調所教授方より津田真一郎（真道）と西周助（周）ら二名が特旨をもって参加を許された。両人の参加は、外国奉行大久保越中守（忠寛）が留学の志を知り、二人のために大いに周旋した結果であった。アメリカ行の内命を受けた者は、その準備に取りかかっていた矢先、文久元年（一八六一）春ごろよりアメリカでは南北戦争が始まり、「ハリスも其後本国の状況益々不穩で工業力の上に於ても到底外国軍艦製造引受の余裕は無いといふので、遂に文久二年正月（一八六二年）に至って日本からの依頼に依る軍艦製造引受の事は此際一と先づ断るといふことを申出て来たので、従って此に亜米利加留学

生派遣のことも中止となった」(『赤松則良半生談』)ということである。

軍艦の建造と留学生派遣の中止についての史料は決して多くはなく、勝海舟の『海軍歴史』(巻二十三——船譜——第五条)の「和蘭留学および開陽艦の記事」に、

文久二壬戌政府大ニ海軍ヲ拡張セントスル折柄、蒸氣軍艦三隻ヲ米國政府ニ注文シ、且留学生ヲモ遣スヘキ筈ナリシカ、適  
 同國南北戦争ニテ其需ニ応セス(後略)

といった条がある位で、戊二月には急きよオランダに振り替えが決定した。

「和蘭国江御軍艦御詔相成候ニ付見込之趣相伺候書付」(外国奉行大久保越中守、軍艦奉行井上信濃守、同木村  
 摂津守、蕃所調所頭取古賀謹一郎らが連名で提出した意見書)の主旨は、軍艦製造中、御軍艦組と蕃所調所出役の  
 のが諸術研究のためアメリカ行を命じられ、それを名替と考え出発の準備をしていたところ支障が生じ、中止となつ  
 た。アメリカに代つてオランダに蒸氣軍艦を一隻発注することになつたからには、堅い決意でいた件のもどもをオラ  
 ンダ行に「振替」て、差し遣わして欲しいといったもので、ふりかえのいきさつについての短い記事を与えている。

亞米利加國政府江蒸氣軍艦二隻御詔相成、製造中御軍艦組蕃所調所出役之もの等諸術為研究被差遣候仰渡、夫々支度取整ひ候  
 儀之処、亞國政府之方差支有之、急速治定之御請ハ不申上趣候処、今般和蘭国江蒸氣軍艦一隻御詔相成候ニ付てハ、右製造方却  
 て速ニ出来可申義と奉存候間、前書亞國江業前為修行被差遣候旨被仰渡候御軍艦組蕃所調所出役之者共ハ、銘々支度等も出来  
 いたし居、何時被差遣候ても差支無之、且ハ銘々一途ニ蕃國江被差遣候儀を規撰と致し、深く存込罷在候を遅延相成候てハ、右

等之氣張を失ひ可申と奉存候ニ付、和蘭国江御詔相成候蒸氣軍艦製造之方江振替、前書之者共被差遣候様仕度此段奉伺候以上 (2)

戊二月

留学生らが、アメリカ行から一転してオランダ行を命じられたのは文久二年（一八六二年）戊三月十三日（陽曆四月十一日）のことで、軍艦操練所において井上信濃守（清直）より、左記のような命を受けた。

先般亜米利加政府え蒸氣軍艦御詔相成右製造中諸術研究として被差遣旨被仰渡、夫々支度相整ひ候儀之所、亞国政府之差支有之、急速其運びに不至候に付、今般改て右軍艦和蘭国政府之御詔相成、依て役々の者も同国へ可相越候。(『旧幕府』)

『赤松則良半生談』によると、江戸でこの命令を受けた者は、士分では内田恒次郎・榎本釜次郎・沢太郎左衛門・赤松大三郎（高橋三郎の代り）・津田真一郎・西周助ら七名であり、また新たに留学を命じられた長崎養生所詰の医師林研海と伊東方成ら二名が長崎より一行に加わる旨奉行衆より伝えられた。

さらに約二ヵ月後の同年五月二十二日（陽曆六月十九日）、こんどは職方七名（古川庄八・山下岩吉・中島兼吉・大野弥三郎・上田寅吉・大川喜太郎・久保田伊三郎ら）がオランダ行を命じられた。先にオランダ行を拜命した士分らに加えて職方（技術者）が加えられたのは、赤松大三郎の「六十年前の阿蘭陀留学」（『大日本』）によれば、「留学生として洋行する者九人は皆士分の者であるが、夫れでは実地の方面に不都合であらうと云ふので、海軍諸技術研究と云ふ立場から見て、更に各種の技術者を同行に加へることゝなつた」ということで、各分野の専門的技術者を参加させたということである。

文久二年戊六月十七日（陽曆七月十三日）——脇坂安宅、水野忠精、板倉勝静ら三閣老は、連名でオランダの國務大臣に宛てて留学生の受け入れ願に「伝習人名前書」（留学生らの名簿）を添えて正式に申し入れた。

壬戌六月十七日

エキセルレンシー

和蘭國事務大臣江

以書翰申入候、抑<sup>おそし</sup>我國人先年貴國教師の伝習を受し以來、我國おゐて航海之諸術始て開け、爾來其學未<sup>いまだ</sup>精熟に至らずと雖も、漸く其奥旨を得んとす、雖然、巨艦の製作に至ては未だ其工作の場を設るに暇あらず、たとひ急にこれを設るとも俄に精巧に至らん事甚た難んずる所なり、依て吾國滞在<sup>オランダ總領事デ、ツィツ</sup>之イカテウキットエスクワイル江貴國おゐて蒸氣軍艦打立之儀相頼み候処、同人にも無<sup>い</sup>異儀了諾ありて、其段速に貴國江申達し候由、誠に満足之至に候、然ては別紙名前之者貴國江差遣し、右製造中船打立方ハ勿論、以岸外諸術をも修業為致度、尤学科之儀は各自その所志を以て夫々取極可學問、諸事可然周旋頼入候、尤船之大サ、馬力の強弱、砲銃之員數、費用之多寡等は委細右同人より被申達し儀と存する間、今こゝに贅せず、此段申入度如斯候、拜具謹言

脇坂中務大輔

花押

水野和泉守

花押

板倉周防守

花押

これによると、學術研修のカリキュラムは、当初から決められていたわけではなく、留学生らの任意、こころざす

ところに任せられていたことがわかる。今ひいた本文のあと、派遣される留学生らの氏名が添えられているが、士分の者たちの名はあっても、なぜか職方のそれはない。

伝習人名前書

取締役

内田恒次郎

士官

榎本釜次郎

沢太郎左衛門

赤松大三郎

田口俊平

津田真一郎

西 周助

官医

伊藤<sub>マ</sub>玄伯

林<sub>マ</sub>硯海

外ニ 水夫小頭、測器師、大工、鍛冶職、鋳物師、平水夫等 七人

通計十六人

かくして留学生十六名のオランダ派遣はきまつたが、オランダへの軍艦建造の発注はすでに三月二十二日（陽曆四月二十日）付で、久世大和守と安藤対馬守の連名でオランダ総領事デ・ウィット (J. K. de Witt) に宛てて出されていた。デ・ウィットは、幕府からの建造要請を外交事務として受けとめず、貿易問題として処理することにし、長崎



のオランダ商社会社の駐在員ボードワアン (A. J. Bauduin) に、幕府の希望を伝えた。ボードワアンは早速、アムステルダムの本社に連絡をとったが、幕府の要請に応じる意がある、との返信を得たのは一八六二年六月二十四日(陽暦)のことであった。

オランダ商社会社は海軍大臣カッテンダイケに諮り、その協力を取りつけ、王立蒸気船機関局の監査官ホイヘンス海軍大佐 (H. Huygens) を軍艦建造の顧問とした。また同社は、ロッテルダムのオランダ蒸気船会社の社長ファン・オールト (J. W. L. van Oordt) に、設計と見積を依頼した。一八六三年春には、建造計画は完成したので、造船所を捜す段階に至ったが、ホイヘンスの提案で競争入札とはせず、造船会社を五つほど当った結果、ドルトレヒトのヒップス・エン・ゾーネン造船会社が、どこよりも早く、安く建造できることがわかり、同造船所と契約を結ぶことにした。

#### オランダ留学生の構成と特色

文久二年のわが国最初の欧州留学生(オランダ留学生)は、本来、軍艦建造をオランダに発注したことに端を發しており、その建造の「立合」(現場監督)の名目で派遣に至ったものであるが、海軍留学生をオランダに派遣する議のきっかけとなったのは、幕末最後のオランダ商館長ドンケル・クルチウスや第一次オランダ海軍教育団の団長ファビュス中佐らの進言によるところが大きく、とりわけファビュスは積極的にこれを強調したという。留学生十六名のオランダ行がきまったところで、一同は出発の準備に取りかかり、文久二年六月十一日(陽暦七月七日)に在府の士分一同は、御軍艦操練所に召し出され、御軍艦奉行井上信濃守(清直、川路左衛門尉聖謨の弟)より、「此度御暇を

賜はつて学業の為和蘭へ遣さる」旨を伝えられたのち、洋行について種々注意をうけ、いくつか誓言させられた。そのうちの主なものは、

- 一、如何なる場合にも日本の秘密を洩さざること
  - 一、切支丹宗門に肩を入れまじきこと
  - 一、本朝（わが国）の風俗を改めまじきこと
- 等であつた。

士分の者は、これら数カ条の誓言に血判をさせられた。オランダに派遣される留学生らは、当時「蘭国御用御軍艦方」とも「和蘭行御軍艦方」とも呼ばれたが、総数十六名の留学生団は、大別すると海軍班・洋学班・医学班・技術班から構成されていた。ここで各留学生の班・氏名・身分・地位・専攻科目・出国時の年齢等について述べると次のようになる。

### （海軍班）

- 取締（団長） 内田恒次郎（正雄）……………（旗本千五百石、海軍諸術、二十五歳——天保九年十一月生まれ）
- 榎本釜次郎（武揚）……………（御家人、軍艦組、機関学、二十七歳——天保七年八月生まれ）
- 沢太郎左衛門（貞説）……………（御家人、軍艦組、砲術、二十九歳——天保五年六月生まれ）
- 赤松大三郎（則良）……………御家人、軍艦組、造船学、二十二歳——天保十二年十一月生まれ）

田口俊平（良直）……………（久世家家臣、軍艦操練所教授方出役、測量学、四十五歳——文政元年三月生まれ）

（同職方）

古川庄八……………（水夫小頭、船舶運用〔操縦〕、水夫の扱い方、二十七歳——天保七年七月生まれ）

山下岩吉……………（一等水夫、船舶運用、二十二歳——天保十二年一月生まれ）

中島兼吉……………（鋳物師、蒸気汽鐘その他の鋳造、三十歳——天保三年六月生まれ）

大野弥三郎（規周）……………（時計師、測量機械の製造、四十三歳——文政三年一月生まれ）

上田虎吉（明治維新後、寅吉）……………（船大工、造船術、四十一歳——文政五年三月生まれ）

大川喜太郎……………（鍛冶職、鋳物一般とくにシャフトの製造、三十一歳——天保三年生——慶応元年八月四日アムステルダムで病死）

久保田伊三郎……………（宮大工、艦内装飾等、生年月日不詳、病氣により脱落し、文久三年七月二十四日江戸で死亡）

（洋学班）

津田真一郎（真道）……………（津山藩士、蕃書（洋書）調所教授手伝並、人文・社会科学（法律・国際法・財政学・統

計学）、三十五歳——文政十二年六月生まれ）

西 周助(周)……………(津和野藩士、蕃書調所教授手伝並、同右、三十五歳——文政十二年二月生まれ)

(医学班)

伊東玄伯(方成)……………(奥医師見習、医学、三十一歳——天保三年九月生まれ)

林 研海(紀)……………(奥医師、医学、十九歳——弘化元年六月生まれ)

海軍班の士分の者らが初めアメリカ行の予定であったとき、軍艦操練所の高橋三郎が一行に加わるはずであったが、オランダに注文換えになるや、赤松大三郎がこれに代ったのである。赤松がその選に上ったのは、すでに万延元年に遣米使節に随行して渡米した経験があり、また古賀謹一郎(開成所頭取)の推挙があったからである。

ここで簡単に参加者一同の横顔について述べると、内田は、旗本千五百石の若様(養子)で御小姓組出身。身分が一番高いところから、一行の取締役(团长格)となった。これに次ぐ身分は、伊東と林の奥医師である。榎本・沢・赤松も、ただ士分というだけの御家人である。田口は久世広周の家臣であったが、久世が老中であつたところから、その御声掛かりで一行に加わつた。田口は一行の中で最年長の四十五歳。赤松は「此人は御老中の御声掛で此行に加つたので、和蘭語の素養もなかつたので留学中も頗る不便を感じ、従つて修業も思はしく出来なかつたのは氣の毒に思つた。帰朝後間もなく世を去つたが、私とは二十歳余の老輩で私等の如き世事に馴れぬ青年は相手にされなかつた位だから、其性行等に就いては多くを知らない」と述べている(『赤松則良半生談』)。



中島兼吉  
(声学家—中島兼子(故人)の祖父)

要するにオランダ語の知識なく、また習っても年のせいで物覚えがおそく、加えて渡蘭後は病弱であったから、他の若い連中とは同じように修業できなかったということであろう。

「職方」の中では、古川と山下は船舶と水夫の扱い方を学ぶ予定で、中島は榑原藩(越後高田十五万石)抱の鋳物師であり、大砲の鋳造にかけては優れた技量を持っていた。当時の人々には痘痕のあるものが多かったが、中島も赤松によれば、「大アバタの男であった」という。

大野は越前大野藩抱のすぐれた時計師・測量機械師であった。オランダ語の素養は無かったが、バタバアからオランダへの航海中に勉強し、「日常には差支無い丈になった」ということである。上田は伊豆の戸田の船大工である。かれは、ロシアのプチャーチン一行が下田で難波した折、西洋型帆船(後の君沢型)の建造に従事し、渡蘭後は赤松と同じ造船術を学ぶ予定であった。大川は腕のよい海軍所(海軍操練所)御用達の鍛冶屋で、多くの西洋型船の建造にも携わったこともあり、渡蘭後「西洋の精巧なる鍛冶術を学ぼうといふ目的であった」が、不幸にも留学中にアルコール性肝炎と鼓腸(腸にガスが異常にたまる病気)により、アムステルダムで病死した。久保田は小石川の名高い宮大工であり、長崎まで一行に同行したが、咯血し、長崎養生所で蘭医ボンペやボードワアンらの診療を受けた。が、江戸に戻ったのち死去した。

オランダ行の留学生団は、海軍・洋学・医学・技術の四班から構成されているものの、軍艦建造の「立合」(監督)と諸学術(海軍諸技術)の修得が第一の狙いであり、次第に参加者が殖えて、十六名の研修団となったものである。この留学生団は、系統だつた組織体というよりは「学習目的を異にした独立体の合流である」<sup>(3)</sup>。が、時代の変革期に際して、めいめいが幕命を奉じ、近代日本を創造するための「共通の建設的な課題」を抱いての渡航であった。大久保利謙教授はオランダ留学の基本的特色について、「このオランダ留学生団は、結果においてはいえ、当時の洋学の全領域にわたり、しかも近代的国防科学から近代的政治経済の学へと多角的総合的に近代国家の建設を目ざすという前向きの実践性をもち、各留学生のレベルもすぐれて高い」と述べておられる。が、じっさい日本の近代化達成の抱負と期待をになつて派遣された各留学生は、人物・識見・学術といい、また技術・技量の点で他に比べて決して遜色がない、第一級の人物であり、当時のエリートであつたといつても過言ではない。

\*

幕末のオランダ留学生(わが国最初の海軍留学生十六名)に関心を持ち、その調査を志してからもうかなりになる。昭和五十一年の盛夏、市立函館図書館の薄暗い閲覧室でペリー関係の史料を閲読していたとき、書架から何気なく抜いて手にとつた小冊子『よみがえる幕末の軍艦——開陽丸』(非売品、共同通信社編)のページをめくるうちに、ますます十六名のサムライに感興がわいて来て、やがて研究に手に染めるようになり、内外の取材を終えて上梓したが、『幕府オランダ留学生』(東書選書、東京書籍、昭和五十七年三月)であつた。

従来、明らかでなかつた在蘭中の留学生の動向その他について、若干の新事実を同書に盛り込むことができたが、史料不足、調査の不徹底、その他の事情等から、今顧みると実に意に満たぬ出来栄えとなつた。同書が出版される一

カ月前に、大久保利謙教授編『幕末和蘭留学関係史料集成』（雄松堂出版、昭和五十七年二月）が刊行されたが、そのころ同史料集を十分に利用する時間的余裕はなかった。さらに『続幕末和蘭留学関係史料集成』（雄松堂出版、昭和五十九年二月）が刊行されるに及んで、オランダ留学生関係の史料のほぼ全てが出つくした観がある。筆者も収蔵の写真を提供し、年表の作成を担当し、多少編纂の仕事と関わりを持った。

筆者は、その後、同史料集と新たに入手したオランダ側の史料をなймаせて書き上げた短い論考を、折にふれて発表し、今日に至っている。が、先年、オランダの知人より送られて来たオランダ留学生関係の新史料（当時の新聞記事のマイクロフィルム）を、昨年の夏休みに解説する機会があったので、研究過程の一報告として紹介しておこうと思う。これらの新史料は『史料集成』に収められていないが、取材で渡蘭した折に見つけた新聞雑誌の記事とともに、本稿に掲げておいた。短い滞在期間中に、何十種類もある新聞の中から、日本人の記事を採取することはなかなか容易ではなく、少なからず苦労したものである。

オランダから送られて来た史料は『アルヘーメン・ハンデルスブラット』（Algemeen Handelsblad）紙（一八六三・六―一八六八・六）が主なもので、これに筆者が現地で採取した『ロッテルダム新聞』（Rotterdamse Courant）『ライデン新聞』（Leydsche Courant）『ドルトレヒト新聞』（Dordrechtse Courant）等の記事を加えることにした。マイクロフィルムには文字が不鮮明な箇所が多くあって、判読にてこずったが、おおかたのご協力を得て訳しおえることができた。不得手な蘭語の疑義について教示を得た、前学士院事務長の庄司三男氏、国費留学生のバフネル氏、A・J・ピニングトン氏、また史料をお送りいただいたアムステルダム在住の勝山光郎氏、ライデン在住のフウートハルス氏、ライデン、アムステルダム、ドルトレヒト、ユトレヒトの各古文書館、ハーグの王立図書館、

アムステルダム海事博物館、慶応大学図書館等のお世話になったが、記して感謝を表します。

注

- (1) 「米国往復書簡」『続通信全覽』所収。
- (2) 「和蘭国江御軍艦御詔相成候に付見込之趣相伺候書付」『海軍歴史』巻の二十三「和蘭国留学及開陽丸の記事」。
- (3) 『幕末和蘭留学関係史料集成』（大久保利謙編著）の「総説」三一ページを参照。
- (4) 前掲書、三三ページを参照。

Schepstijdingen.

Brouwersh. (Z.) *Aang.*

3 junij *Tuende Brödre,*

*Christiansen, Holmstr.*

*Adriana Petronella,*

*V. d. Velde, Helvoet*

*Vertrokken.*

3 *Ternate, Cars, Helvoet*

*Tuende Brödre, Geelmuyden, Dordrecht*

オランダにある幕末維新史料





ヘレフトスライスの町（当時の銅版画より，筆者収蔵）

船舶情報

ブラーウエルスハーフェン入港

六月三日——「トフェンデ・ブロードレ号」

船長 クリスティアンセン（ホルメストランド）

「アドリアナ・ペトロネルラ号」

船長 ファン・デル・フェルデ（ヘレフトスライス）

ヘレフトスライスに向けて出港す。

同 日——「テルナーテ号」

船長 カルス（ヘレフトスライス）

「トフェンデ・ブロードレ号」

船長 ヘルムイデン（ドルトレヒト）

注

日本人留学生十五名を乗せた「テルナーテ」号のオランダ到着（同船ははじめブラーウエルスハーフェンに着き、次いでヘレフトスライスに寄り、最終的にはロッテルダムで日本人を降ろした）を知らせるこの記事は、『ロッテルダム新聞』(Rotterdamsche Courant——

**Leyden 5 juni.** — Heden werd alhier bevorderd tot doctor in de geneeskunde, de heer A. P. Fokker, geboren te Middelburg, na publieke verdediging van een academisch proefschrift: over de temperatuur van den mensch in gezonden en zieken toestand.

— Eenige der Japausehe jongelingen, welke naar Nederland zijn gekomen om hunne opleiding te ontvangen, hebben aanvankelijk hun intrek genomen in het hotel de Zon alhier.

— Heden zijn alhier ter markt aangebragt 6941 lammeren.

**Amsterdam 5 juni.** — Het vervoer langs den Nederlandschen Rijn-spoorweg heeft gedurende de maand mei opgebracht aan reizigers / 123,155, aan goederen / 46,813, aan direct verkeer van reizigers

オランダ留学生らがライデン市に到着したことを知らせる『ライデン新聞』の記事

一八六三年六月四日付)の中で見つけたものである。

Rotterdamsche Courant

(1863. 6. 6)

Leyden 5 juni.

—Eenige der Japausehe jongelingen, welke naar Nederland zijn gekomen om hunne opleiding te ontvangen, hebben aanvankelijk hun intrek genomen in het hotel de Zon alhier.

ライデン——六月五日。

教育を受けにわが国にやって来た何人かの日本青年は、まず当地の「ホテル・ド・ゾン」<sup>(1)</sup>に旅装をといた。

注

(1) このホテルは正式には Hotel de Gouden Zon (太陽ホテル)



人だかりがしている建物が「ホテル・ド・ゾン」

ほどの意)という。ライデン市ブレーストラート百五十五番地(現在の番地)にあった。建物は健在であるが、今はたしか洋品店になっていたと記憶している。「ホテル・ド・ハウデン・ゾン」の名称が用いられたのは一八九二年(明治二十五年)頃までであり、その後 *Hôtel Le Soleil d'Or* (黄金の太陽)ほどの意)と名を改めた。アムステルダム生まれの(オルヘ・ジャン・オベルテュル *George Jean Oberthur* (当時五十三歳)が、一八四三年から一八六六年一月まで同ホテルの持主であった。一八六六年五月以後は、ローレンス・マルティヌス・フレデクス・スミットという者が経営を引き継いだ。

なお、一八六〇年代の『総合住所氏名案内』(*Algemeen Adresboek*)には、ライデン市内のホテル名やその広告は出ていないが、オベルテュルに関する記載が見られる。

*Oberthur, G. J. logementhouder. brâststr. 4, 279*

logementhouder は「ホテル経営者」の意である。

*Algemeen Handelsblad*

(1863. 6. 10)

's GRAVENHAGE, 9 Junij Naar men verneemt zullen

eenige der jeugdige Japanezen zich in de residentie komen vestigen. Tot dat einde is voor hen in de hooge Nieuwstraat eene woning gehuurd.

六月九日 ハーグ

何人かの若い日本人は、当地において居を定めることになっているというのである。そのためかれらはホーヘ・ニューウエストラートに家を一軒借りた。

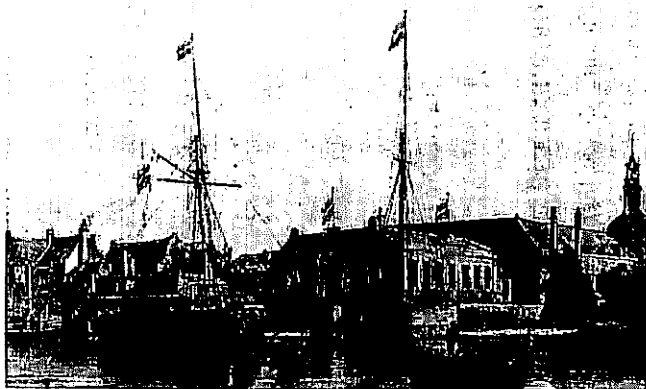
注

『アルヘーメン・ハンデルスフラット』（一八六三年六月十日付）の記事。日本人留学生（士分）は、津田・西・職方らをライデンに残し、ハーグに移ったが、先ず借家を求め、そのあと分散して暮らした。

Leydsche Courant

(1863, 6, 12)

's GRAVENHAGE, 11 Junij. — Heden hebben eenige jeugdige Japanners, onder geleide van Prof. Hoffmann, de residentie bezocht en tevens hunne opwachting gemaakt bij de ministers van koloniën, binnenl. zaken en marine.



ライデンの航海学校（当時の銅版画より，筆者収蔵）

ハーグ——六月十一日。

本日、何人かの若い日本人は、ホフマン教授の案内でハーグを訪れ、更に植民地省・内務省・海軍省などを表敬訪問した。

注

『ライデン新聞』（一八六三年六月十二日付）の記事。

（1）ホフマン教授（一八〇五〜一八七八）はライデン大学の東洋学の教授で、日本人世話役となった人。

Leydsche Courant

(1863. 6. 15)

BINNENLANDSCHE BERIGTEN

LEYDEN, 13 Junij.

—— Een drietal van de Japansche marine-officieren zijn heden onder geleide van Jh. Pompe van Meerdervoort naar 's Hage vertrokken, om daar voorloopig in een voor hen gehuurde woning te worden gehuisvest. Ook de twee aan het detachement

toegevoegde studenten in de geneeskunde zijn mede vertrokken: deze zullen echter spoedig naar Leyden terugkeeren, om, overeenkomstig de bedoeling van hun gouvernement, en zooals zij zelven wenschen, te Leyden te studeren, welks hoogeschool één jaar geleden door het gezantschap van Japan met een plegtig bezoek vereerd werd. Twee studenten in de regten blijven hier voor goed gevestigd, terwijl het de wensch van den chef des detachements is, dat één bootsman en één matroos op de bloeiende kweekschool voor zee-vart alhier, die hij gisteren bezocht heeft, mogen worden toegelaten. Vier werklieden, te weten één instrumentmaker, één gieter, één scheepstimmerman, zullen voor alsnog tot nadere bepaling hier verblijven. De vier laatstgenoemden verstaan geen Hollandsch.

ライデン——六月十三日。

——日本の海軍士官のうち三名は、本日ボンベ・ファン・メーデルフォールト<sup>(1)</sup>に案内されてハーグに向けて出発した。ハーグでは一時借りておいてあった家に住むことになる。また日本海軍派遣隊に加えられた二名の医学生<sup>(2)</sup>も一緒に出発した。しかし、これらの人々は直きにライデンに戻ってくるであろう。かれらの政府の要請に応じ、またライデンで学ぶのがかれら自身の願ひであつたからである。

一年前に日本の使節<sup>(3)</sup>が儀礼訪問したライデン大学で法律を学ぶ二名の学生<sup>(4)</sup>は、いつまでも当地に住むことにならう。一方、日本派遣隊の指揮官が望んでいることは、水夫長と水夫各一名を当地のすばらしい航海学校<sup>(5)</sup>に入れることである。指揮官は昨日この学校を訪れた。二名の水夫はけさ入学を許可された。四人の職人、すなわち、機械製作者、鋳



晩年のポンペ（筆者収蔵）

物師、鍛冶屋、船大工らは別命あるまでライデンに滞在する予定である。後者の四名は、オランダ語を少しも解さない。

注

- 『ライデン新聞』（一八六三年六月十五日付）の記事。
- (1) ホフマンと同じく日本人世話役の一人。当時、ハーグ在住。
  - (2) 林と伊東のこと。
  - (3) 文久の遣欧使節（竹内下野守一行）のこと。
  - (4) 津田と西のこと。
  - (5) 山下と古川が学んだ所。当時の建物の一部が現存する。

Algemeen Handelsblad

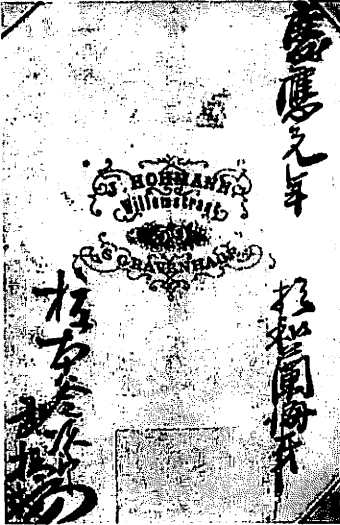
ROTTERDAM, 28 Julij.

(1863. 7. 30)

—— De officier van marine Eno mota Kamadzi roo, en de doctor Hayäsi Ken Kai, beide in Japansche



若き日の榎本釜次郎



榎本の署名

dienst, bezochten heden, vergezeld van den Heer Harges, officier machinist bij de Nederlandsche marine, de fabriek van stoom en andere werktuigen van de Nederlandsche stoomboot-maatschappij te Fejenoord: met de meeste belangstelling namen de Japanners, alles tot in de minste bijzonderheid, in oogenschouw, waarbij zij blijken gaven van hooge wetenschappelijke kennis, ook in het vak van werktuigkunde te bezitten. Na den Heer van Oordt, directeur der genoemde maatschappij, in wiens gezelschap de fabriek werd bezigtigd, hunne erkentelijkheid voor de gegeven inlichtingen en vriendschappelijke ontvangst te hebben betuigd, vertrokken zij des namiddags omstreeks 3½ ure weder naar 's Hage (N. R. C.)

ロッテルダム——七月二十八日。

海軍士官榎本釜次郎と医師である林研海は、兩人とも日本



政府に仕えているのだが、本日、オランダ海軍の機関将校ハルデス氏に伴われて、フェイエノールトにあるオランダ汽船会社の蒸気機関およびその他の機械を作っている工場を訪れた。これらの日本人は最大の関心をもって、最も小さな事柄に至るまで、一切を見て廻った。この視察によって、かれらは機械学の分野においても、高度の知識をもっていることがはっきりわかった。上述の会社社長フウエル・ファン・オールト氏の集いに臨み、あたえられた情報や友情に満ちた歓迎に対して感謝をのべたのち、かれらは午後三時半ごろ再びハーグに帰って行った。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』（一八六三年七月三十日付）の記事。

Algemeen Handelsblad

(1863. 8. 7)

AMSTERDAM, Donderdag 6 Augustus.

Aan hetzelfde hotel zijn gisteren afgestapt twee Japannezen, die eenige merkwaardigheden alhier hebben bezocht en na het middagmaal in genoemd hotel te hebben gebruikt, met de trein van 4½ ure weder vertrokken.

アムステルダム——八月六日（木曜日）

昨日、同ホテル（注・「ドレーン・ホテル」）に二人の日本人が立ち寄った。かれらは当地の名所を何箇所か訪れ、上述のホテルで昼食をとったのち、四時半の汽車で再び去って行った。

注

『アルホーム・ハンデルスブラッド』（一八六三年八月七日付）の記事。

Leydsche Courant

(1863. 8. 12)

——Er zijn thans zeven Japanners hier gehuisvest, namelijk zes zee-officieren, waaronder de kommandant, mitsgaders een geneeskundige. Zij houden zich nu nog uitsluitend bezig met het aanleeren van talen, alsook met theoretische oefeningen in de zeevaartkunde. Later zullen eenigen zich met der woon vestigen te Vlissingen en de anderen aan het Nieuwe Diep. De kommandant blijft in de residentie wonen. Al de overige mede onlangs aangekomen Japanners wonen te Leyden en zullen zich geheel aan de industrie wijden. Hun verblijf hier te lande is bepaald op vier jaren.

目下七名の日本人が当地に下宿している。すなわち医師一名と六名の海軍士官で、その中には指揮官<sup>(1)</sup>がいる。かれ

らは航海術の理論的訓練と同じく、いまだに言葉を学ぶのに忙しい。いずれ何人かはフリシゲンに住み、他の者はニューウェ・ディープに住むことであろう。指揮官はずっとハーグで暮らすであろう。その他、最近オランダに到着した日本人はライデンに住んで、産業に全力を傾むけることになっている。かれらがオランダに滞在するのは四年と定められている。

注

『ライデン新聞』(一八六三年八月十二日付)の記事。

(一) 内田恒次郎(一八四二〜七六)のこと。維新後、正雄と名を改め、学校取調御用掛り、大学中博士となる。

ちなみに内田の名刺についてふれておく。内田以外の海軍留學生の写真や名刺は、かなり沢山オランダに残されているが、内田自身の「名刺」となると、これまで未だ見たことがなかった。しかし、昭和六十年夏、来日オランダ人(商館長)の調査取材に渡蘭した折、図らずも原物を手に入ることができた。アムステルダム(勝山光郎氏より下宿に電話が入った)。

「内田の名刺と文久遣外使節(竹内下野守一行)の写真所持するオランダ人がハーグに住んでいるが、会ってみませんか?」  
という。

持主はP・C・リンク(Rinck)という名の老人だが、老衰が進んでいるので元気なうちに会っておいた方がよい、と勧められた。

筆者はかねて内田の新史料の発掘を心がけていたときであったので、このニュースに歓喜した。そして残り少ない夏も過ぎ、そろそろ枯葉も見られる八月末に、勝山氏の車でハーグへ向った。

午後二時すぎ、あらかじめ電話で約束しておいたとおり、ドルイフェンストラートのリンク氏宅を訪ねた。リンク氏によると、近頃あまり健康がすぐれず、静かに暮らしているという。氏は、現在八十九歳になるが、まだ耳も口も達者であった。

*Obituarium van den Japanneeschen Residenten.*

諸取締役  
内田恒次郎



内田恒次郎

内田恒次郎の名刺  
(筆者収蔵)

けれど何となくさえぬ音色から、健康の方がはかばかしくない印象を受けた。

リンク氏は一八九九年五月十八日、ハーグに生まれ、長じて国家警察官となり、二十九年間勤務し、警視を最後に引退し、恩給生活に入った。氏の祖父はフリートウリヒ・ヴィルヘルム・リンク (Friedrich Wilhelm Rinck 1817-1902) というドイツ人で、一八一七年にアイゼナハ Eisenach (東ドイツ南部の町) で生まれ、一八二三年にハーグにやってくる、オランダ女性と結婚し、一九〇二年同地で亡くなったという。職業は写真帳の製造業であった。リンク氏が家に伝わる話として記憶しているのは、日本人が三度、祖父 F・W・リンクが一八六〇年代当時住んでいた、ハーグ市スハウブルフ (Schouwburg) 二番地の家を訪れたということである。

最初の訪問客は、文久使節の随員五、六名であり、お土産に『図像山海経詳註』(文堂藏板) とある漢籍を一冊と、人物写真八枚ほど置いて行ったという。訪問者の中には医師松木弘庵 (一八三四〜九三) その他の面々(名前不詳) がいた。二回目、三回目の日本人訪問者については定かでないが、この中に内田恒次郎がいたということである。リンク氏によると、日本人がやって来たのは、製本や装丁の技術を学ぶためであったらしい。内田と製本(綴じ方)とは結びつかないが、かれは在蘭中、欧州各地の写真や風俗・風景画をたくさん蒐集したと

いうから、あるいはそれらを製本するためにリンク氏の祖父宅を訪ね、その際に名刺を置いて行ったものであろう。リンク氏は、

「文久使節随員の写真と漢書は家宝であるから譲れないが、内田の名刺なら差し上げましょう」といって好意を示してくれた。

名刺は縦八センチ、横四センチ二ミリの大きさであり、表には「諸取締役 内田恒次郎」(墨書)とあり、その左側にオランダ語で、

*Oetsida Tsoené dai roo,*

*Commandant van het Japansche detachement.*

(「在蘭日本派遣隊の指揮官」ほどの意)

と印刷されている。

つかのまの訪問ではあったが、リンク氏から貴重な話を聞かせてもらった上、珍しい内田の名刺まで恵与されて、こんなにうれしいことはなかった。やがて丁寧にお礼を言つて戸外に出たが、街中、西日に照らされていて、まだいく分か暑かった。……

(2) オランダ南西部——アムステルダムの南西二百七キロ。開陽丸が日本に向けて出帆した所。

(3) オランダ北西部、オランダの海軍基地がある。伊東と林が学んだ「海軍病院」があった。

Algemeen Handelsblad

(1863. 9. 18)

DORDRECHT, 16 Sept. Heden werd op de nieuw aangelegd werf van de Heeren C. Gips en Zonen, in het Willigenbosch alhier, de kiel gelegd van het door gemelde scheepsbouwmeesters aangenomen oorlogschip ten dienste van het Japansche gouvernement.

ドルトレヒト 九月十六日

当地ウィリヘンボスのC・ヒップス・エン・ゾーネン氏の新しい隣接した造船所において、上述の造船業者が請負った日本政府に用いられる軍艦に竜骨がすえられた。

注

『アルヘーメン・ハンデスブラット』(一八六三年九月十八日付)の記事。

Algemeen Handelsblad

(1863. 10. 9)

NIEUWEDIJF, 8 Oct. Volgens nader bericht is Zr. Ms. stoom-fregat Zeeland naar Vlissingen vertrokken

オランダにある幕末維新史料

八五

om daar een bezoek te ontvangen van een der Belgische Ministers: ook onze Minister van Marine zal bij dat bezoek tegenwoordig zijn; daarna vertrekt de Zeeland naar de Kaap de Goede Hoop.

ニューウエ・ディープ 十月八日

さらにくわしい情報によると、蒸気艦ゼーラント号は、ベルギーの大臣の訪問を受けるためにフリシゲンに向ったとのことである。またわが国の海軍大臣は、その訪問に付き添うことになっている。その後、ゼーラント号は喜望峰に向う予定である。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』（一八六三年十月九日付）の記事。なお、ゼーラント号には、古川・山下らが乗り訓練をうけた。

Algemeen Handelsblad

(1863. 10. 19)

VLISSINGEN, 17 Oct. —Van het vertrek van Zr. Ms. fregat met stoomvermogen Zeeland, tot heden toe nog niets met zekerheid te melden.

フリシゲン 十月十七日

蒸気艦ゼーラント号の出港は、本日に至るもまだ確かに伝えられていない。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六三年十月十九日付)の記事。

Algemeen Handelsblad

(1863. 10. ?)

NIEUWEDIJF, 7 Oct. Zr. Ms. stoomfregat Zeeland is heden middag, onder het lossen der gebruikelijke salutschoten, van hier naar Vlissingen gestoomd en zal aldaar door den minister van marine worden ge-inspecteerd.

ニューウェ・ディープ 十月七日

蒸気艦ゼーラント号は今日の午後、慣例となつてゐる祝砲を發し、当地よりフリシゲンに向つて航進した。同艦はフリシゲンにおいて海軍大臣の査閲を受けることであらう。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六三年十月?)の記事。

オランダにある幕末維新史料





西周助<sup>カサハ</sup> (周) の二度目の下宿 (中央建物) (筆者撮影)

Loge gehouden Donderdag 20 October 1864 [.....]

In dese Loge is tot Leerling V. M. aangenomen Nisi Sioussuke geboren te Tuwano in Japan, oud 35 jaren tydelyk wonende te Leiden, van beroep Japansch officier, netwerk [.....] handtekening [.....]

Nisi Siousoeke

西 周助

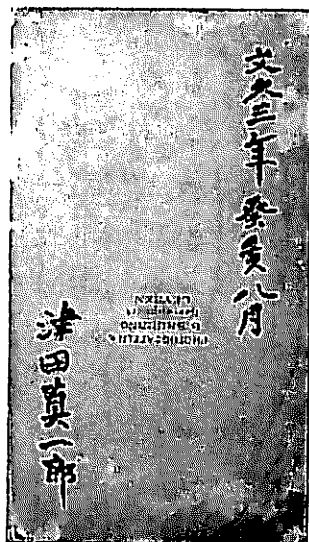
一八六四年十月二十日 木曜日

支部会員集会所に入会。当支部に、日本の津和野で生まれた西周助をフリーメーソンの会員として入会することを許可する。年齢三十五歳、ライデンに一時滞在。職業は日本の士官。署名により……

Loge gehouden Donderdag 17 Nov. 1864 [.....]

In deze Loge zyn tot Leerling V. M. aangenomen Tsoeda Sinnitsie<sup>トソエダ シンニツシエ</sup> roo, geboren te Toeyama te Japan





津田真一郎（真道）の写真と署名（三崎ユキ氏提供）

注

昭和六十年の暮、筆者は未知のオランダ人より一通の手紙を受け取った。文面によると、日本人の署名がある古い記録を発見したという。フリーメーソンのライデン支部「ラ・ヴェルテュー」の記録保管人アブラハム・フットハルスというのが手紙をくれた人である。書簡には、

「私はライデン市のフリーメーソンの支部「ラ・ヴェルテュー」に勤務する記録係ですが、数カ月前、同支部の十九世紀の記録を調べていたとき、「規約簿」の記載事項に何気なく注意を引かれ、驚いた次第です。「規約簿」には、一七五七年以来、わが支部に入会を許された新会員すべての名前と署名が記載されており、そのページの一枚に、二人の日本人の名と署名を見つけました。（その記載があるコピーを同封いたします）。当該の日本人は、きっとお気づきになられたことと思いますが、ツダ・シンイチロウとニシ・シュンスケです」とあった。

フットハルス氏によれば、津田と西はどのような方法でライデン支部と接触したものか分らぬという。同氏は、当時も今も、会員になるには、会員の紹介が絶対必要である、といっている。しかし、残念ながら、この間の事情を明らかにする記録は残されていないらしい。ライデンにおける津田と西の留学生活については、いずれ何か書く機会もあろうかと思う

## Algemeen Handelsblad

(1864. 11. 22)

Dordrecht, 19 Nov. Aan het door tusschenkomst der Nederlandsche Handel-maatschappij voor de Japanse regering bij de C. Gips en Zonen alhier in aanbouw zijn de schip, werd heden in tegen woordigheid van de heeren president en een der directeuren van deze maatschappij, van den heer kommandant en eenige heden van het te lande zich bevindende Japansche detachment en van eenige de naam gegeven van Kai-Yoo-Mar, in het Hollandsch betekend Voorlichter.



ヒップス兄弟  
(アムステルダムの海事博物館蔵)

ドルトレヒト 十一月十九日。

日本政府のために、オランダ商会社を通じて当地のC・ヒップス・エン・ゾーネン氏の造船所で建造中の艦に、本日、オランダ商会社の社長および重役、オランダ滞在中の日本派遣隊の団長および隊員らの出席をおおぎ、その艦の建造と関係がある何人かの人々は、オランダ語で voorlichter を意味する “開陽丸” という名を与えた。

注

『アルホーメン・ハンデルスフラット』(一八六四年十一月二十二日付)の記事。

(一) 「開腸丸」を Voorlichter と誤したのはホフマン教授である。

Hoog Edel Gestrenge Heer,

Met dezen heb ik de eer UEd uit de noodigen, by het gelegenheid van het feestgeven aan het volk, die op de werf van de heeren Gips by het voor onze regering in aanbouw zynde Schip werkzaam is.

Het zal my byzonder genegen doen, indien UHEd een tijd daarover beschikken magti alsdan wacht ik UHEd geheel officieus morgen zaterdag legen 9 uur's namiddags aan het local van der horst.

Ik hoop hierop Uw antwoord te mogen verwachten, My noemde, met de meeste hoogachting en vriendschap ben ik

UHEd gestr. Dr. Dienaar

Akamats D. S.

Frydag 2 December 1864

拝啓

ヒップス氏の造船所でわが国の軍艦の建造に従事しておられる各位の労をねぎらうための宴に、この招待状をもつ



若き日の赤松大三郎  
(渡蘭後撮影したもの)



*Marine Hospital.*

*Den Helder.*

伊東と林が学んだデン・ヘルダーの海軍病院

て貴殿をお招きすることを光榮に思います。

もし御出席賜われれば幸いに存じます。明日、土曜日午後九時ごろに、ファン・デル・ホルスト氏のレストランにおいで下さい。

敬意と友情をもってお返事をお待ちいたします。

敬具

赤松大三郎

一八六四年十二月二日 金曜日

注

赤松が、ヒップス造船所の従業員に宛てて出した慰労会の招待状。

Algemeen Handelsblad

(1864. 12. 8)

NIEUWE DIEP, 6 Dec. De Japanezen Ito<sup>o</sup> Gempak<sup>o</sup> en Hajasi Kenkai zijn alhier aangekomen om bij het marine-hospitaal als geneesheeren te worden opgeleid.

ニューウェ・ディーブ 十二月六日。

伊東玄伯と林研海という日本人が海軍病院で医師としての教育を受けるために当地に到着した。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六四年十二月八日付)の記事。

Algemeen Handelsblad



大川喜太郎 (三崎ユキ氏提供)

(1865. 9. 23)

Op heden overleed na eene kortstondige Ziekte  
de Heer OOKAWA KITARO, is den ouderdom van  
33 jaren.

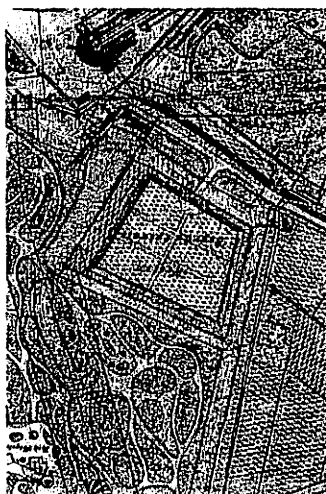
AMSTERDAM, 21 September 1865.

*Strekende deze tot algemeene Kennisgeving.*

しばらくわづらった大川喜太郎氏は本日、三十三歳で  
亡くなった。

一八六五年九月二十一日 アムステルダム





「西の墓地」の地図  
(アムステルダムの古文書館蔵)



アムステルダム郊外の「西の墓地」跡、  
現在は公園となっている。(筆者撮影)

本広告をもって御通知にかえます。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六五年九月二十三日付)の「広告欄」に載った記事。  
(1) アムステルダム市ニューマルクト三十八番地(現在の番地)で死去。

(1865. 9. 25)

Heden ochtend is op de Westerbegrafplaats een der Japannezen begraven, die zich ter dezer stede bevinden. Hij is in den ouderdom van 32 jaren overleden. Bij de plegtigheid waren 10 Japannezen tegenwoordig, waaronder twee in de kleederdragt van hun geboortsland.

本日、朝——「西の墓地」において日本人の一人が埋葬された。<sup>(1)</sup>かれは当アムステルダム市に住んでいた。かれは三十二歳で亡くなった。葬儀には十名の日本人が参列した。そのうちの二人は、自分たちが生まれた国の服装であった。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六五年九月二十五日付)の記事。

(1) 職方大川喜太郎の埋葬式のこと。日本側から、榎本・沢・赤松・津田・西・伊東・林・中島・上田・大野ら十名が会葬した。

Dordrechtsche Courant

(1865. 10. ?)

\* \* Bij voldoende Waterhoogte, zullen de Scheeps-Bouw meesters C. GIPS EN ZONNEN, op Donderdag den 2 November 1865, des namiddags omstreeks 4 uren, van hunne werf in het Willigenbosch alhier, te water laten, het Schroef-Stoom-Oorlogsschip,  
*KAI-YOO.*

Dordrecht, den 30 October 1865.

\* \* Bij gelegenheid dat het Schip *KAI-YOO* van stapel loopt, zal er des avonds  
*SOIRÉE MUSICALE*  
zijn.

De *RESTAURATIE* zal van alles voorzien wezen.

L. A. ELAND,

wijnbrug.

水位が十分なら、C・ヒップス・エン・ゾーネン造船会社は、一八六五年十一月二日木曜日の午後四時ごろに、当  
ドルトレイトのウィリヘンボスの同社の造船所において、「推進式蒸氣軍艦開陽丸」の進水式を取り行ないます。

一八六五年十月三十日　ドルトレヒト

“開陽丸”が進水した機会に、夕方、“音楽の夕べ”が催され、またごちそうの用意があります。

L・A・エラント

注

『ドルトレヒト新聞』(一八六五年十月?　日付)の記事。

Algemeen Handelsblad

(1865, 10, 10)

NIEUWE DIEP, 7 Oct. Dezer dagen zijn alhier gearriveerd twee Japannezen, de een is officier-machinist en de ander officier bij de Japansche marine. Zij zullen hier een paar maanden vertoeven om tegenwoordig ze zijn bij het optuigen en het stellen der machine van Zr. Ms. oorlogsvaartuig Adolf Hertog van Nassau.

ニューウエ・ディープ　十月七日

最近、二人の日本人が当地にやって来た。その内のひとりは機関将校で、もう一人は日本海軍の士官である。かれらは戦艦アドルフ・ヘルトフ・ファン・ナソウの機関の取りつけと調整に立ち会うために、当地に数ヵ月逗留すること

オランダにある幕末維新史料

九九

こなむら。

注

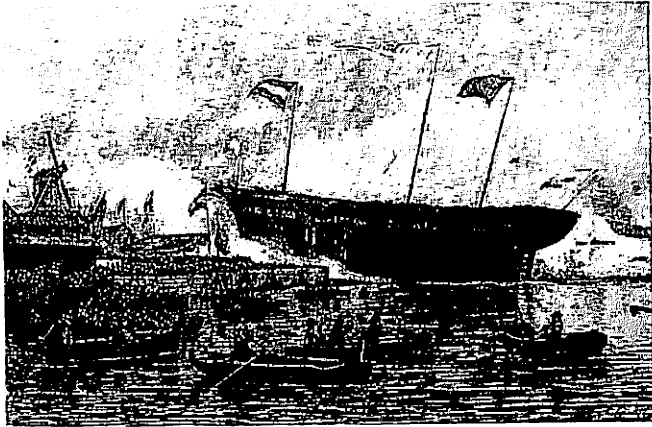
『ムルヘーメン・コンツェルヌブラット』（一八六五年十月十日付）の記事。

## Dordrechtse Courant

(1865. 11. 4)

—Gisteren namiddag omstreeks vier ure, is van de werf van de scheepsbouwmeesters C. Gips & Zonen, in het Willigenbosch alhier, met het beste gevolg te water gelaten het schroef-stoom-oorlogsschip *Kar<sup>1</sup>-Joo<sup>1</sup>* gebouwd voor rekening van het Japansche gouvernement. De te water lating van dit kolossale schip leverde een stating gezigt op, en ging zoo gemakkelijk als zelden bij het te water brengen van het kleinste vaartuig wordt aangetroffen. Onder de tallooze toeschouwers welke toegestroomd waren om dit nationale schouwspel te aanschouwen, merkte men op den minister van marine, de directie der Ned. Handelsmaatschappij en onderscheidene autoriteiten.

Na den afloop werd van wege de directie der Ned. Handelsmaatschappij in een der lokalen van de societeit *de Harmonie* een diner gegeven, waarop menige dronk getuigde van belangstelling in de oude vriendschappelijke betrekkingen tusschen Nederland en Japan. Na dat door den president der Handelsmaatscha-



開陽丸の進水式（『ネーデルランス・マガジン』より）

ppij was ingesteld het welzijn van der keizer van Japan, werd die toast beantwoord door den Japanschen kommandant, die instelde de gezondheid van den koning van Holland. De scheepsbouwmeesters C. Gips & Zonen ontvingen te dezer gelegenheid tot eene erkentelijke herinnering aan de door hen zoo glansrijk volbrachte taak, geschenken in zilver zoo wel van de directie der Ned. Handelsmaatschappij als van de Japansche officieren. Het feest werd nog oggeluisterd door eene serenade van het corps muzikanten der schutterij, dat ook van zijne belangstelling in de voor deze stad zoo gewichtige gebeurtenis wilde doen blijken.

昨日の午後四時ごろ、当地ウイルヘンボスのC・ヒップス・エン・ゾーネンの造船所において、日本政府の注文で造られた推進式蒸気艦「開陽丸」の進水式が大成功のうちに取り行なわれた。この巨大な艦の進水式はおごそかな光景を生んだ。小舟の進水式のときでさえ、まれにしか見られないことだが、艦はやすやすとすべり出した。この国家的な光景を眺めようと群がって来た無数の見物人の中には、海軍大臣、オランダ商

事会社の重役、賓客などの姿がみられた。

進水式がおわつてから、オランダ商事会社の重役によつて「ハルモニークラブ」の一室において晩さん会が催された。その折に大勢の者が昔からの日蘭の交友關係を祝して乾杯した。オランダ商事会社の社長が日本皇帝の健康を祝して乾杯の辞を述べてから、日本の指揮官がオランダ国王の健康を祝して答礼の祝杯をあげた。C・ヒップス・エーン・ゾーネン造船会社は、立派な仕事を成しとげたことに對する感謝の記念に、日本の士官ならびにオランダ商事会社の重役より銀製の記念品を贈られた。祝宴はさらに国民軍樂隊の演奏によつて光彩を添えられたが、これもまたドルトレヒトの市がこんどの重要な出来事に大きな關心を寄せていたことを示すものである。

注

『ドルトレヒト新聞』(一八六五年十一月四日付)の記事。

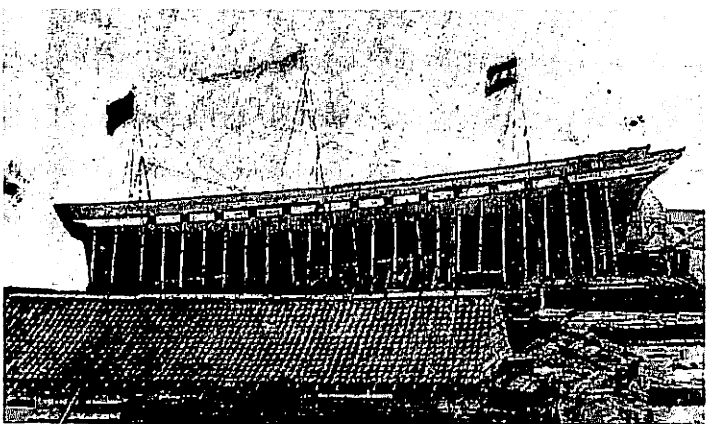
(1) ドルトレヒト市ペンネン・ワレフエスト五番地(写真参照)。

(2) 内田恒次郎のこと。

Algemeen Handelsblad

(1865. 11. 4)

Dordrecht, 2 Nov. Heden namiddag werd van de nieuwe werf van de Heeren C. Gips en Zonen alhier, met het beste gevoig te water gelaten het Japansche schroef-stoomfregat Kai-Yoo. Eene overgroote menigte



建造中の開陽丸

belangstellenden, niet enkel inwoners der grijze Merwedestad, maar ook van andere plaatsen, woonden het belangwekkende schouwspel bij. Op de tribune merkte men op den minister van marine en een aantal zee-officieren, de directie der Nederl. Handel-Maatschappij, de zich hier te lande bevindende Japansche officieren, enz.

De Kai Yoo (in het Nederduitsch Voorlichter), is een stoomfregat van ruim 2600 tonnen, en zal gewapend worden met 28 getrokken 160 ponders.

De machines van 400 paardenkracht worden vervaardigd aan de fabriek van de Nederl. Stoomboot-Maatschappij op Fijenoord; de stoomketels bij den Heer Paul van Vlissingen en D. V. Heel te Amsterdam. Het schip zal van Dordrecht naar Hellevoetsluis worden gebragt, waar de machine zal worden ingezet. Het is zeker het grootste schip dat in ons vaderland ooit op eene particuliere werf is gebouwd.



ドルトレヒト 十一月二日

今日の午後、当地のC・ヒップス・エン・ゾーネン氏らの新しい造船所で、日本の推進式蒸気フリゲート艦「開陽丸」の進水式が大成功のうちに行なわれた。興味深くみつめるおびただしい数の群集、灰色のメルウエデ川畔の町の住民ばかりか、他の町の人々までがこの興味深い光景に立ち会った。演壇には海軍大臣、大勢の海軍士官、オランダ商社会社の重役、在蘭中の日本の海軍士官らの姿がみられた。

「開陽丸」(オランダ語では *Voorlichter* を意味する) は優に二千六百トンもある蒸気フリゲート艦であり、線条入りの百六十ポンド砲二十八門を装備することになる。四百馬力の蒸気機関はフェイエノールトのオランダ汽船会社で、蒸気釜はフリシゲンのアウル氏とアムステルダムD・V・ヘル氏の蒸気船会社でつくられる。同艦はドルトレヒトよりヘレフトスライスに運ばれ、そこで機関がすえられる。開陽丸はたしかにわがオランダの私設の造船所で造られた最大の艦である。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』(一八六五年十一月四日付)の記事。

*Algemeen Handelsblad*

*Dordrecht, 3 Nov. Gisteren na den afloop van het Japansche schroefstoom-fregat Kai-Yoo, is van wege*

(1865, 11. 6)

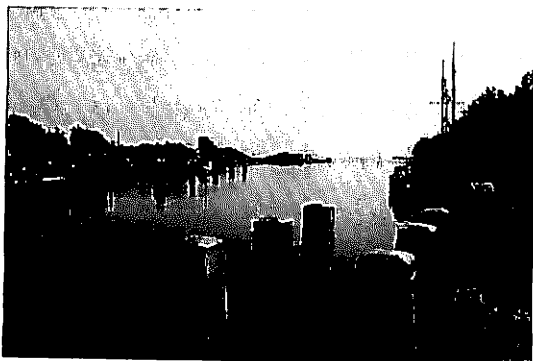


ドルトレヒトの「ハルモニー・クラブ」(中央の建物)  
(筆者撮影)

de directie der Ned. Handelmaatschappij in een der localen van de societeit de Harmonie een diner gegeven. Onder de vele toasten die gedronken werden, stelde de president der Handelmaatschappij een in op het welzijn van den Keizer van Japan, welke dronk door den Japanschen commandant beantwoord werd met een op de gezondheid van den Koning van Nederland. De scheepsbouwmeesters C. Gips en Zonen ontvingen ter dezer gelegenheid tot eene herinnering aan de door hen volbragte taak, geschenken in zilver, zoowel van de directie der Nederl. Handelmaatschappij als van de Japansche officieren. Het feest werd nog opgeluisterd door eene serenade van het corps muzikanten der schutterij, dat ook van zijne belangstelling in de voor deze stad zoo gewichtige gebeurtenis wilde doen blijken.

ドルトレヒト 十一月三日

昨日、日本の螺旋推進式蒸気フリゲート艦、開陽丸の進水が取り行



ヘレフトスライスの運河—オランダ留学生らはこの運河を通過してロッテルダムに上陸した。

なわれてから、ハルモニークラブの一室でオランダ商社会社の理事の主催で晩さん会が催された。何度も重ねた祝盆の中で、オランダ商社会社の社長が日本の皇帝の健康を祝すと、日本の指揮官はオランダ国王の健康を祝して答礼の盃を飲みほした。C・ヒップス・エン・ゾーネン造船会社は、仕事を完遂したことの記念として、このたびオランダ商社会社の理事会ならびに日本の士官たちから、銀器を贈られた。祝宴はさらに国民軍隊の演奏によって光彩を添えられた。これはドルトレヒトドルトレヒトの市が、このような重大な出来事に関心を寄せていることを示している。

注

『アルヘーメン・ハンデスブラット』(一八六五年十一月六日付)の記事。

Algemeen Handelsblad

(1865. 11. 14)

\* DORDRECHT, 12 Nov. Het Japansche schroefstoomfregat Kai-Yoo zal in deze week van hier naar Hellevoetsluis vertrekken, en aldaar verder te worden gereed gemaakt.

ドルトレヒト 十一月十二日

日本の推進式蒸気フリゲート艦開陽丸は、今週中に当地よりヘレフトスライスに向う予定である。そして彼の地において更に機関を装備することになる。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』（一八六五年十一月十四日付）の記事。

Algemeen Handelsblad



晩年のカッテンディケ

's GRAVENHAGE, 7 Feb.

(1866. 2. 8)

—De begrafenis van wijlen den Heer W. J. C. ridder  
Huyssen v. Kattendijke zal Vrijdag C. K. plaats hebben. Het  
lijk zal ten 9 ure des ochtends op Eik-en-Duinen ter aarde  
worden besteld.

ハーグ 二月七日

W・J・C・リイデル・ハイセン・ファン・カッテンディケ<sup>(1)</sup>氏の埋

葬が来る金曜日に取り行なわれる。遺体はエイク・エン・ダイネン<sup>(2)</sup>において朝九時に葬られる予定である。

注

『アルホーム・ハンデルスブラット』(一八六六年二月八日付)の記事。

- (1) 元長崎海軍伝習所教官。オランダの海軍大臣(一八五七—一八六六)。日本人留学生の接伴や指導につくした。
- (2) ハーグ市内の墓地。

Algemeen Handelsblad

(1866. 10. 11)

Men deelt aan het *Utr. Dagblad* mede: Op de 22 sten dezer maand is de zeildag bepaald van het te Brouwershaven zeilreiliggend Japansch oorlogsfregat Kaijoo ("Voorlichter";) de eerste ster van het sterrebeeld de groote beer, voerende 32 stukken, waarvan 26 getrokken dertigponders. Dit te Dordrecht gebouwd uitstekend oorlogschip zal op zijn reis naar Japan worden gecommandeerd door den luit. t. z. 1 ste Kl. Dinaux; als 1e officier zal de luit. ter zee Witkop Koning fungeren en als offic. —machinist de luitingen. Hards en verder de Japansche officieren der marine Oetida, Enomoto, Sawa en Tagoezzie, welk allen, vergezeld van de in onderscheidene fabrieken hier te lande werkzaam geweest zijn de Japansche onderofficieren, met dat schip naar hun vaderland terugkeeren. De beide Japansche studenten in de geneeskunde Ito

Gepak en Hajazi zullen hier te lande achterblijven om aan het hospitaal te Nieuw Diep hunne geneeskundige studien voort te zetten; zoo zal ook de ingenieur voor den scheepsbouw Acamaz te Amsterdam tot dat doel nog eenige jaren hier te lande vertoeven.

『ユトレヒト・ダハブラット』紙に伝えた。

今月の二十二日は、日本の戦艦「開陽丸」(夜明け前)——大熊の星座中の一番星の意——備砲三十二門、その内の二十六門の砲身は三十ポンドである——が、ブラーウエルスハーフェンにおいて帆装するための出発日と決められている。ドルトレヒトで建造されたこのすばらしい軍艦は、日本へ回航される際に一等海軍大尉ディノールによって指揮される。一等海軍大尉ウイトコプ・コニング、機械技師兼機関大尉のハンデスらはそれぞれの職務を遂行する。



伊東玄伯

また日本の海軍士官である内田・榎本・沢・田口らは、わが国の名高い工場に雇われた日本の下士官を伴って、くだんの軍艦とともに故国に帰る。日本の医学生である伊東玄伯と林ら両人は、ニューウェ・ディープの海軍病院で医学を研究するために残留するはずである。アムステルダムにいる造船技師の赤松も研修のため、更に何年かわが国に滞在する。

注

『マルヘーメン・コンドルスプラット』(一八六六年十月十一日付)の記事。

Algemeen Handelsblad

(1866. 11. 1)

——Cisteren middag werd door het hoofd der sedert twee jaren in Nederland verblijf houdende Japannezen in het Hotel de l'Europe een luisterrijk afscheidsdiner gegeven aan de vele Nederlandsche vrienden en bekenden, die veel hebben bijgebracht tot het welslagen van het doel, waartoe de Japannezen ons land hebben bezocht. Onder de gasten merkte men op den Heer de Monchy, pres. der Nederl. Handel-Maatschappij, den kapl-luit. ter zee de Fremery en andere hooge autoriteiten. Zoo men weet zullen de Japansche heeren eerst daags, met een hier te lande voor hunne eigene rekening gebouwd schip naar Japan terugkeeren.

昨日の午後、二年このかたオランダに滞在している日本人の団長主催のすばらしいお別れの宴が、日本人がわが国を訪れた目的を果たすことに大いに力を貸した大勢のオランダの友人や知人を招いて、「オテル・ド・ルーロープ」(注・ハーグのホテル)で催された。賓客の中には、オランダ商事会社の社長モンセイ氏、フレーマリ海軍大佐およびその他のお偉ら方の姿が見られた。日本の紳士たちが、自国の費用でわが国で建造した艦に乗船して、間もなく日

本へ歸ることはよく知られてゐる。

注

『アルホーム・インデルスブラット』(一八六六年十一月一日付)の記事。

### Algemeen Handelsblad

(1868, 6, 1)

NIEUWE DIEP, 29 Mei. Bij het vertrek van Heeren Japansche officieren van gezondheid Itoe Gempak<sup>4</sup> en Hayasi Kinkai<sup>4</sup> van deze plaats, waar zij bij het marine-hospitaal hunne wetenschappelijke vorming groote deels verkregen hebben, zijn door hen zelven en namens de keizerlijke Japansche regering, heden diverse prachtige geschenken in zilver van sierlijke inscriptiën voorzien, Japansche lakwerk en zijden stoffen aangeboden aan hunne leeraren de H. H. H. Slot, dirigerend officier van gezondheid 1ste klasse, S. D. Saelise, dirigerend officier van gezondheid 2 de klasse; dr. D. Hellema officier van gezondheid 1ste klasse en P. C. de Winter, 1ste apotheker der zeemagt: alle belast met het onderwijs in de geneeskundige wetenschappen aan het marine-hospitaal alhier.



ニューウェ・デープ 五月二十九日

当地の海軍病院で学問形成の多くを受けた日本の軍医である伊東玄伯と林研海ら両氏は、退去のため、本日から個人と日本政府との名において、銀器に銘を刻したもの、日本の漆器および絹布といったすばらしい贈物を、当地の海軍病院で医学教育の任にあった一等軍医H・H・H・スロット、二等軍医S・D・サエリセ、一等軍医D・ヘレマ博士、海軍一等薬剤師P・C・ド・ウインテルらに贈呈した。

注

『アルヘーメン・ハンデルスブラット』（一八六八年六月一日付）の記事。

〔補遺〕

伊東玄伯（方成）は、オランダに足掛け五年滞在し、明治元年（一八六八年）十二月三日に帰国した。が、帰朝する前年（一八六七年）、かれはロッテルダム（Rotterdam）の「公共病院」に数カ月ほど勤め、同僚のド・ブライン医師（Dr. de Bruin）と懇意になり、写真<sup>ポトリート</sup>などを交換した。伊東は帰国した年の十二月、図書少允に任じられ従六位に叙せられ、典藥寮医師となる。このとき名を「方成」と改めた。

明治二年八月、大学中博士に任じられ、さらに九月、高階経徳・青木邦彦らと共に大典医となる。翌三年三月、正六位に叙せられ、九月、侍医規則取調御用を仰せつけられた。十月、再び留学することになり、渡蘭。

〔伊東系譜〕（『伊東玄朴伝』所収）には「三年……<sup>明治</sup>……十月五日御用有之歐羅巴州へ差遣サル四年八月十九日大典医被



オランダ留学中の伊東玄伯

免大侍医ニ任セラル七年四月廿三日帰朝ス」とある。この通りだとすれば、一八七〇年秋に日本を立ち、一八七四年春まで約四年ちかい歳月をヨーロッパで過ごしたことになるが、それは視察と医学修業が目的であったものであろう。また『伊東玄朴伝』にある「明治三年再欧州に遊び独国に学び、同七年帰朝」（傍点筆者）といったくだりを読むに至っては、頭を混乱させられるだけだが、た



右端の家がユトレヒトの伊東の下宿  
(現在のウィッテフラウエン街8番地)

えられるが、当時の同居人は次のようなオランダ人一家である。

この家族は、一八七一年十二月二十三日より翌一八七二年四月二十六日まで同番地にいた。

クリステイアン・ヨハン・アウエリング (一八三八年三月九日生まれ、陸軍士官)

ペトロネルラ・ホメス (一八三八年二月十九日生まれ、妻)

コルネリウス・アウエリング (一八七二年一月九日生まれ、同夫妻の息子)

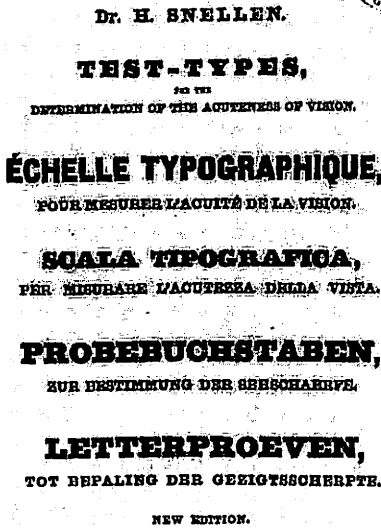
また一八七二年五月一日から一八七五年一月六日まで同番地で暮らしたオランダ人は、アントワネット・マリア・ミンネ・ファンディク (一八〇七年六月一日ユトレヒト生まれの未亡人) である。

伊東の留学先は、ユトレヒトの北、ベヒネホフ (Bagijnhof とよ Begijnhof とも綴る) に在った、一八五八年創

しかに伊東は再渡欧のときにドイツやイギリスを訪れてはいるけれど、ドイツには留学してはいないと思われる。伊東がこのとき滞在したのはまたオランダであり、こんどはユトレヒトで一八七一年 (明治四年) 春三月から一八七四年 (明治七年) 春まで暮らした。伊東の下宿先は、ユトレヒト大学図書館がある向い側のウィッテフラウエンストラート Wittevrouwenstraat 六百五十一番地 (現在の八番地) の家で、建物は健在である。伊東はおそらく一八七一年三月頃までに同所に入居していたと考

設の「オランダ眼科病院」(Nederlandsch Gasthuis voor Ooglijders)である。かれは(1)ランドルト(Landolt)医師、H・スネレン(Snellen)教授、エンゲルマン(Engelman)教授らの指導を受けて、眼科学一般について研修した。とくにスネレン教授は「視力検査表」(Letterproeven, tot bepaling der gezichtscherpte)によって内外に知られた第一級の眼科医であった。

伊東がこのオランダ最初の眼科の専門病院に研修医として入局したのは一八七一年三月六日のことか、同病院の「来客芳名簿」(Gastenboek)にはこの日付をもつて署名されている。『オランダ眼科病院における看護と教育に関する十四年報』(14 de Jaarlijks verslag betrekkelijk de Verpleging en het Onderwijs in het Nederlandsche Gasthuis voor Ooglijders, 1873)には「伊東医師」の名前が出て来るが、スネレン教授の視力検査表はすでに各国語

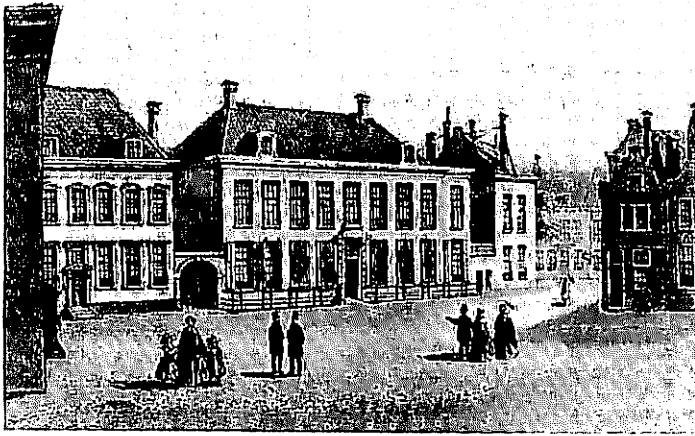


スネレン教授の「視力検査表」

に訳したので、「今年伊東医師の手で日本語に訳され刊行される」とある。また同年報は、日本からやって来た伊東医師が教授の指導を受けながらカエルの角膜(cornea)を使って実験を行なっていること、ランドルト医師と一緒に視力実験を試みていることなどを伝えている。

翌一八七四年に刊行された『十五年報』には、また次のような記事がみられる。

「当病院の弟子である伊東玄伯医師は、以前大君の侍医を勤めていた者だが、故国に帰ることになったので御多幸



正面中央の建物「オランダ眼科病院」(筆者収蔵の銅版面より)

を祈ります。かれは当病院で受けた教育に感謝の意を表するために、わが施設に二百五十ギルダー寄付し、理事として仲間入りすることになった。

ちなみに同書には、「オランダ眼科病院」の理事 (bestuurder) としての伊東の名が見えるが、それには、

Dr. ITO, Gempak.....Tokai (Japan)

とある。

ユトレヒト滞在中の伊東は時折、旧知とも会ったと思われるが、ライデン大学のフィッセルング教授に宛てて出した蘭文書簡が何通か残されているので、オランダ滞在中の動静について若干手がかりを与えてくれる。それは一八七二年七月から九月にかけて三度ばかり同教授に出したもので、新刊書(『経済学提要』)を受け取ったことに対するお礼とか、津田・西らへも同書を送り届けることを請け合った内容とかである。また一八七二年九月二十六日付のフィッセルング宛の伊東書簡に「私は六週間以上もロンドンやベルリンで過ごし、二、三日前に帰宅したところです」というくだりがあるところから考えると、一八七二年夏、伊東は一カ月以上もイギリス・プ

ロシアを旅行したことになる。それが単なる夏期休暇であつたのか、それとも視察旅行であつたかについては何とも  
いえない。

維新後、オランダに再留学した伊東の動静を伝える日本側の史料は乏しく、わずかにオランダ側の史料だけがその  
片りんを表わしている。「オランダ眼科病院」における伊東についての史料は、先年、渡蘭の折に入手したものが、  
蛇足ながらユトレヒトにおけるかれの居住地とともに紹介することにした。

## Brief Notes concerning the Japanese Naval Mission to the Netherlands during the Last Days of the Tokugawa Regime (1862-1868).

Sometime between the first year of Manen (1860) and the first year of Bunkyu (1861), the Tokugawa government developed a plan to enlarge and strengthen its navy. This plan involved the manufacture of warships and the reform of both the military and the naval organizations. The Ministers for Naval Affairs at the time, Kimura Settsu no Kami and Inoue Shina no Kami, proposed a plan in which naval students would be sent to foreign countries in order to receive training in shipbuilding techniques while the ships ordered by the Japanese were under construction. These proposals met with the approval of the Ministers for Foreign Affairs, but financial difficulties on the part of the Shogunate prevented the implementation of this plan.

When Townsend Harris, the American Minister to Japan, was about to leave Japan for his homeland, he obtained an interview with one of the Prime Ministers of the Shogun's administration, Ando Tsushima no Kami. In this interview Harris urged the Prime Minister to entrust the U.S. government with the construction of the naval vessels, the manufacture of the arms and so on. The Japanese government acceded to his request and sent him an official letter, dated the seventh of July of the first year of Bunkyu (i.e. 14 August, 1861), in which an order was made for the construction of Western-style war vessels. However, the Japanese government was forced to abandon this order by the sudden outbreak of the Civil War. Thus, in the February of the second year of Bunkyu (1862), the Shogunate transferred its order to Holland, which had

enjoyed the confidence of Japan as most favoured nation for nearly two centuries. Japan notified Holland of the new order for warships in a letter addressed to J.K. de Wit, the Consul General of the Netherlands, which was dated the 22 March of the second year of Bunkyu (i.e. 20 April, 1862). To de Wit, this was not a diplomatic matter but rather a trade issued, and accordingly he entrusted it to the agent of the Dutch Commercial Co., at Desima, A.J. Bauduin. Bauduin in turn obtained the consent of his head office in Amsterdam to undertake the construction of a war vessel.

The Dutch Commercial Co., in Amsterdam, after consultations with the Minister for the Dutch Navy, W.J.C. Huyssen van Kattendijke (1816-1866), employed Colonel H. Huygens (1810-1867) to act as advisor during the construction of the war vessel. J.W.L. van Oordt, the President of the Dutch Steamship Co., was requested to draw up plans for the vessel ("Kaiyo Maru"), as well as estimates of cost. As regards the actual construction of the vessel, the Dutch Commercial Co., following a proposal of Colonel J. Huygens, did not open the contract to competitive bidding, but rather sounded out five shipbuilders who seemed likely to be able to undertake the work. As a result of their inquiries, the Dutch Commercial Co., decided that Gips en Zonen, a shipbuilder in Dordrecht, seemed the most suitable company to undertake the work, in terms of both speed and price.

The decision to dispatch Japanese naval students to the Netherlands had its origin both in the fact that the warships were being ordered from that country, and in the need for the actual work of construction in the shipyard to be supervised. The students' mission not only had its regular business to carry out, but also various special subjects of study. The mission consisted of four groups to which a total of fifteen students belonged.



The students belonging to the first group were as follows:

Name	Age	Subjects of Study
Uchida Tsunejiro (Commander)	25	The navy in general
Enomoto Kamajiro	27	Machinery
Sawa Tarōzaemon	29	Gunnery
Akamatsu Daisaburo	22	Shipbuilding
Taguchi Shūnpei	45	Surveying

The students belonging to the second group were as follows:

Name	Age	Subjects of Study
Tsuda Shinichiro	35	Jurisprudence, International law, economics, finance and statistics etc.
Nishi Shunsuke	35	The same as above

The students belonging to the third group were as follows:

Name	Age	Subjects of Study
Itoh Gempaku	31	Medicine
Hayashi Kenkai	19	The same as above

All of the above-mentioned students were officers. The fourth group consisted of petty officers, called “shokkata”, and included mechanics and sailors. In this group we find the following persons:

Name	Age	Subjects of Study
Furukawa Shōhachi	27	Steering and management of seamen
Yamashita Iwakichi	22	The same as above
Nakajima Kanekichi	30	The manufacture of steam engines and casting in general
Ōkawa Kitaro	31	The manufacture of shafts and casting in general
Ueda Torakichi	41	Shipbuilding
Ōno Yasaburo	43	The manufacture of precision instruments

The naval mission left Shinagawa in Yeddo (present-day Tokyo) for Nagasaki on 18 June of the second year of Bunkyu (i.e. 14 July, 1862) on board the ship "Kanrinmaru". It took them sixty-five days to reach Nagasaki from Yeddo, because of a breakdown in the ship's engine and also an outbreak of measles among the crew. On 11 September of the second year of Bunkyu (i.e. 2 November, 1862), the "Calijpso" took the students on board, and left Nagasaki for Batavia. The voyage, however, was not free from incident. On the night of October 5-6 of the second year of Bunkyu (i.e. 26-27 November, 1862), the "Calijpso" was stranded on the Alceste Reef, between the Banka and Billiton Islands. Fortunately, both passengers and crew were rescued by natives of the Poolow-Lepar Island. The Japanese passengers, and some of the crew, then boarded the "Bronbeek" on 16 October of the second year of Bunkyu (i.e. 7 December, 1862), and she set sail for Toboali, where all of them then transferred to the "Palembang", a government steamer.

On 18 October of the second year of Bunkyu (i.e. 9 December, 1862), the "Palembang" dropped her anchor in the roadstead of Batavia. J.A.G. Basslé, a civil servant and formerly one of the staff of the Dutch Factory at Desima, was waiting for the Japanese, and he took them to the "Hôtel des Indes". where the party stayed for nearly two weeks. During their stay in Batavia, the Japanese students visited a variety of

places, such as the Society “De Harmonie” (a gentlemen’s club), the machine factory, the government sawmill, the gasworks, the fortress, the grammar school, the famous Botanical Gardens and the residence of the Governor-General of the D.E.I. at Buitenzorg (some 60 km. from Batavia). On 3 November of the second year of Bunkyu (i.e. 22 December, 1862), the “Ternate” left Batavia for Holland with the members of the Japanese mission on board. En route to Holland they called in at St. Helena, arriving there on 8 February of the third year of Bunkyu (i.e. 26 March, 1863), and staying at the “Storer’s Hotel” for four days. During their brief stay, they called at the late residence of Napoleon Bonaparte and also at his grave. The party was also warmly received as special guests in various private houses and at the Consul Generals of Sweden, Norway and America.

On 11 February of the third year of Bunkyu (i.e. 29 March, 1863), the Japanese mission boarded the “Ternate” once more and left St. Helena for Holland. The ship sailed directly to Brouwershaven in the Netherlands, dropping anchor there on 16 April of the third year of Bunkyu (i.e. 2 June, 1863). Since their departure from Yeddo for the Netherlands, as much as 323 days had elapsed. The following day, after calling in at Hellevoetsluis, the “Ternate” proceeded directly to Rotterdam, where all the members of the Japanese mission disembarked. To their surprise, they found great numbers of curious onlookers waiting for them in crowds. The Dutch were greatly struck by the strange appearance of the Japanese, who were all in Japanese dress (kimono), with “chonmage” (topknots) on their heads, and each wearing two swords.

Professor J.J. Hoffmann (1805-1878), who had been appointed to take care of the Japanese, showed them the way to the Hollandsche Spoorweg (i.e. the Central Station, known at the time as the “Delftsche Poort”), where, at 7.45 p.m., they boarded a first-class carriage for Amsterdam. The party was astonished by the well-equipped carriages and the high speed of the trains, this being their first experience to ride

in a train. When they arrived in Leiden at 8.35 p.m., they found themselves surrounded once again by a large crowd of spectators, just as they had been in Rotterdam. They proceeded by carriage to the "Hotel de Gouden Zon" (present-day No. 155) in Breestraat, where it had been decided they should stay until taking up lodgings. Soon after they had begun to live in Leiden, Professor J.J. Hoffmann brought two students, Le Maître and Henricus Roelofsius de Breuk, and introduced them to the Japanese for use as guides. The Japanese were conducted through the city, visiting various places, such as the grammar school, the University, the Botanical Gardens, the museum, the hospital, the castle, the churches and the residence of the Mayor (i.e. the present-day No. 85 Breestraat). One day Dr. Pompe van Meerdervoort (1823-1908), who had formerly been a naval surgeon and had stayed in Nagasaki, came to Leiden to consult with the Japanese regarding the location and subjects of their studies. The Japanese discussed together the most appropriate course of action to take, and finally came to the conclusion that Tsuda, Nishi and the "shokkata" should remain in Leiden while the rest of them moved to the Hague.

Those Japanese who remained in Leiden took lessons in Dutch for some time from J.A. van Dijk, the headmaster of an elementary school, and after that they proceeded to their more specialized studies. The names of many of the teachers from whom the Japanese received their tuition remain obscure, but Tsuda and Nishi received private lessons from Professor Simon Vissering (1818-1888), an eminent scholar, from 3 October, 1863, until October, 1865. They visited the professor's private house twice a week in the evening (Tuesday and Friday) and took notes on his lectures. Ōno studied under Abraham van Emden (1797-1886), Professor Frederik Kaiser (1802-1872) and Andre Hohwü (1803-1885). Ōkawa and Nakajima are conjectured to have received their training in the ironworks of D.A., Sletren, A.J. Degon and later from the Koninklijk Nederlandse Grofsmederij.

The addresses of those who remained in Leiden were as follows:

Name	Address	Occupation
Tsuda Shinichiro	Hooglandsche Kerkgracht No. 27 (present-day No. 44) and Hooge Woerd No. 290 (present-day 125)	
Name of Landlord or Person resided with		Occupation
Maurits Hartog (Hoog Woerd No. 290)		Merchant
Nishi Shunsuke	Hooigracht No. 827 (present-day No. 94) and Nieuwe Rijn No. 97 (present-day No. 94)	
Dijk van Egbert		Student (?)
Furukawa Shōhachi Stevanes van Kooten	Oude Rhÿn No. 1090 (present-day No. 43)	Baker
Yamashita Iwakichi	The same as above	The same as above
Nakajima Kanekichi Eldik	Ouderyn No. 127 (present-day No. 52)	Office clerk
Ueda Torakichi Ōno Yasaburo Moses van Reÿn	Levendaal No. 436 (present-day No. 27)	Merchant
Ōkawa Kitaro Klaüs Heitmann	Oude Vest No. 1154 (present-day No. 67)	Blacksmith

Among the above-mentioned students, Tsuda and Nishi changed their lodgings two or three times during their stay in Leiden. Nakajima moved to the Hague on 30 August, 1864, but his precise whereabouts there remain unknown. Ōno also moved to an address in Amsterdam (present-

day Toren Steeg No. 7) on 3 September, 1864. Ueda moved to Dordrecht on 21 January, 1864. Ōkawa moved to Amsterdam, probably in August, 1864, where he died of acute hepatitis on 21 September, 1865, at Nieuwmarkt No. 38. Furukawa and Yamashita moved, together with Akamatsu, to Dordrecht (present-day Wykc Munt No. 959) on 1 December, 1863.

The commander and his six officers left the “Hotel de Gouden Zon” and moved to the Hague on 14 June, 1863. Prior to their departure from Leiden, they had rented a house in which they could lodge together in the hooge Nieuwstraat. Within a short time of their arrival in the Hague, these Japanese had brought two Dutchmen into their employ. One of these, a man named Witte, was engaged to act as a general servant, while the other, who was called Frederiks, was employed as a language instructor. Most of the officers in the mission, and especially those who resided in the Hague, had a good knowledge of the Dutch language. As Professor J.J. Hoffmann and Dr. Pompe had already pointed out, however, it was necessary for them to make efforts to correct their poor pronunciation of the language. Realizing that, from the point of view of improving their linguistic ability, it was inadvisable for them to lodge together in one house, they decided to live separately. The addresses of the officers and the names of the families or individuals with whom they lived are as follows:

Name	Address	
Uchida Tsunejiro (Commander)	hoogenstraat No. 23 and Landerboten No. (?)	
Name of landlord or person resided with		Occupation
Walfskehl Dorothea, Rosalie		Maid-servant
Enomoto Kamajiro	Gedempte burgwal No. 18	
Willem Schröder		Mesmerist

Taguchi Shūnpei	Plaats No. 17 and Raamstraat No. 39	
Jansell Petrus Johannes Karel		Civil servant
Akamatsu Daisaburo	Wagenstraat No. (?)	
Bael (?)		Watchmaker
Sawa Tarōzaemon	Spui 1	
H.M. Becht		Gunsmith
Hayashi Kenkai	Spui No. 15 and Spuis No. 75	
Polak Daniels Daniel		Lawyer
Itoh Gempaku	Amsterdamsche Veerkade No. 26	
Grauschaupt Frederik Coenraad		Tailor
and Weyer Lodewyh Hendrik		Pharmacist

The addresses for the officers above are given in their contemporary form; the corresponding modern addresses have not yet been ascertained by the author. The names of the Dutch families and individuals with whom the Japanese lived are also to some extent uncertain.

Before leaving Japan, the members of the mission had made an undertaking that they would dress and wear their hair in traditional Japanese style while in Europe. In the event, however, they were forced to take van Kattendijk's advice and switch to European-style dress, because whenever they went out they found themselves surrounded by curiosity-seekers, to such an extent that they had to request the police to control the traffic.

After settling into their respective lodgings in the Hague, the officers began to receive their private lessons. Most of the classes in specialized subjects were held in Uchida's house, teachers and students gathering there for this purpose. In the morning the Japanese applied themselves to their specialized subjects of study, while in the afternoon they took a lesson in Dutch. The names of all the teachers and the subjects which

they taught are given below:

Name of teacher	Subject	Students
J.A.E. Dinaux (lieutenant)	Ships fittings, gunnery, operations, navigation, shipbuilding	Uchida, Enomoto, Sawa, Taguchi
H. Huygens (Captain, Inspector of the Royal Naval Steam Service) and his men	Steam engines	Enomoto
W.De Frémery (Commander, Inspector of Royal Artillery Royal Netherlands Navy) and his men	Gunnery, gunpowder	Sawa
J.L.C. Pompe van Meerdervoort (Surgeon-Lieutenant)	Physics, chemistry, mathematics	Itoh, Hayashi, Enomoto, Akamatsu
F.P. Stutterheim	Chemistry	Enomoto
Frederiks	Dutch	Uchida, Enomoto, Sawa, Taguchi, Akamatsu, Hayashi, Itoh

As regards the doctors, Itoh and Hayashi, after studying physics, chemistry, mathematics and Dutch in the Hague, they moved to the Marine Hospital at Nieuw Diep in Den Helder. They pursued their medical studies there under the following teachers:



Name of teacher	Subject	Students
H.H.H. Slot naval surgeon	Medical science in general	Itoh, Hayashi
S.D. Saelise surgeon Dr. D. Hellema	the same as above	
P.C. de Winter (apothecary)	Pharmacy	The same as above

Later, Akamatsu also left the Hague, going first to Dordrecht, and then later to Amsterdam, where he received the following private lessons:

Name of teacher	Subject	Student
Tiedemann	Shipbuilding	Akamatsu
Van der Mate (?)	Civil engineering, utilisation of water, architecture	Akamatsu

The ship ordered by the Japanese government, which was eventually named the “Kaiyo Maru”, was built in the shipyard of Gips en Zonen at Dordrecht. The vessel set sail from Vlissingen for Japan on 1 December, 1866, under the command of J.A.E. Dinaux (1830-1874), with a full crew and nine Japanese passengers – Uchida, Enomoto, Sawa, Taguchi, Ōno, Nakajima, Ueda, Furukawa and Yamashita. Itoh, Hayashi and Akamatsu were left behind in Holland, where they prolonged their stay by a few years in order to pursue their studies further. The “Kaiyo Maru”, after calling in at Rio de Janeiro and Anboina, finally arrived in Yokohama Bay on 29 April, 1867 (i.e. 25 March of the third year of Keio). At the time of the Meiji Restoration, however, the Dutch-made warship did not enjoy good luck, meeting disaster on 28 December

1868 (i.e. 15 November of the first year of Meiji). On this day she ran aground in the bay of Esashi in Hokkaido, and, nearly two weeks later, she sank to the bottom of the sea.

At the time various items appeared in the press relating to different aspects of the Japanese Naval mission; the present writer gathered together such reports from various different Dutch newspapers of the time. Since these materials are not included in the "Bakumatsu Oranda Ryūgaku Kankei Shiryo Shūsei" ("A Collection of Documents relating to the Mission of Students to the Netherlands sent by the Tokugawa Shogunate 1862-1868", Tokyo, Yūshodo Shoten, 1982, or its sequel (1984), I felt that they should be presented to the world. I would like to express my deep indebtedness to the Municipal Archives in the Hague, Amsterdam, Leiden, Utrecht and Dordrecht, and also to the Royal Library in the Hague for their various kindnesses.

T. Miyanaga,  
Tokyo, 30 June, 1987.